

平成 26 年度 外国人留学生入学試験 小論文
出題の意図と解答の傾向

【出題の意図】

『日本人の価値観－異文化理解の基礎を築く－』（原聰 かまくら春秋社 2013）からの出題である。「自文化」や「自分」を理解していなければ、「多文化」や「他者」の理解は困難である。また、「自文化」、「自分」の理解の進展に伴い、一旦理解したと思われた「異文化」ですらも、変容していく可能性がある。価値観というものは常に育んでいくことが重要なのである。受験者には、「日本」という「異文化」の中で大学生活を送っていく上で、どのように「異文化」というものを捉えていけば、有意義な留学生活が送れるのかを一度よく考えてみてほしいと思い、この文章を入学試験の問題として採用するに至った。

設問にあたっては、これから本学で学ぶにあたって必要とされる、(第二言語としての)日本語能力、文章読解能力、文章表現能力、論理的思考力を問うことに重点を置いた。

設問 1 では、日本語の教材に現れやすい漢字とともに、日本語の教材には現れにくい本学で学ぼうとする大学生には読めてほしいと思う漢字も取り上げた。設問 2 から設問 5 では、文章を理解する力に加え、それを再構成する力を測った。今回の出題文では、比較的高いレベルの読解力が求められ、特に熟読する力の有無が問われた。それに加え、設問 5 では、日本語の学習を単なる言語の学習として捉えているだけなのか、「他文化」や「他者」、「自文化」や「自分」について考察しながら学びを深めていっているのか、そのような普段の外国語学習への姿勢も問われている。

【解答の傾向】

＜全体的な傾向＞

読解能力の差が大きく現れた。表面だけでなく、内容を深いところまで、しっかり理解できた受験者は全体的に高得点になっている。

文章表現力は全体的に高めで、多くの学生が小論文対策をしっかり行った上で、受験に臨んでいることが窺えた。しかしながら、中国語を母語とする受験者には、簡体字、単語レベルでの中国語の使用が大変多く見られた。また、文体が統一できていない受験者もいた。

＜設問 1＞

日本語の教材にも現れやすい a、c、e に関しては、正答率が高かった。b、d に関しては正答率が非常に低かった。

＜設問 2＞

根拠をまとめる問題であるため、理由を示す「から」等を末尾に用いる解答を期待したが、多くの受験者において、それができていなかった。しかしながら、その点を除けば、正しく解答できていたものが多かったと言える。

＜設問 3＞

慎重に、全体を通して読まなければ、文意を全く反対に解してしまう可能性がある問題である。受験者の解答においても、下線部②の直後の「若者にとって、このような気配りは重荷になっている」までを読み、判断し、誤った解答をしてしまったと思われる

ものが多く見られた。また、十分に内容を理解できなかったためか、本文を単純に抜き出し、解答を曖昧にしたものも多かった。この設問の正答率は非常に低かった。

<設問4>

明らかな間違いが少ないという意味では、正答率が比較的高い問題であった。しかし、解答につながる部分を抜き出し、そのまま記述しただけの受験者が非常に多く、自分の言葉で再構成できている受験者はわずかであった。

<設問5>

「文章を参考にして」と設問に書いてあるにも関わらず、本文との関連が見出しにくい論述をしていた受験者が少なからず存在した。本文の読解が十分にできていなかったためだと推測できる。

また、逆に、本文を引用するばかりで、自身を反映した独自性のある論が展開できていない受験者も少なからず存在した。

ほぼ全員が小論文対策をしっかりやってきた上で受験していると感じられたが、中には、それまでに書いたことがあるのであろう類似したテーマの小論文に捕われ、今回の設問において、論点がずれてしまったもの、オリジナリティーが十分に発揮されないもの等もあった。

自分の経験を例に挙げる受験者は多くいたが、経験談の記述にとどまるような解答が多かった。単なる経験談にとどまらず、自分の価値観をもとに、その経験を分析し、論述を行った場合には、高く評価した。

その他、文章の構成、論の展開といった点にも重点を置いて、採点を行った。

字数の制限があるため、明らかに字数が少ないものは減点の対象とした。

日本語だけでなく、自分の持てる知識を活用し、自分の考えを明らかにしなければならぬ問題であり、日本語の学習を単なる言語の学習と捉えてやっていただけでは、なかなか解けない問題である。日々の生活の中で、様々なことに興味を持ち、自ら考える力を養うことが望まれる。